［３］　職業科による実践

一人ひとりが目的意識を持ち丁寧に作業に取り組んだ実践　＜陶芸コース＞

①　基本的な考え方

陶芸コースでは、「基本的な働くリズムの体得・態度の養成」「道具を効果的に使っての見通しを持った丁寧な作業技能の習得」「物を作る喜び・楽しみを味わうこと」などをねらっている。また、製品を附養文化祭や福祉展で販売したり、附養文化祭の体験コーナーでお客様と一緒に製作したりすることも目標とし、目的を持って主体的に働くことをめざしている。

陶芸コースの生徒は１年生１名、２年生２名、３年生２名の計５名で編成されている。どの生徒もある程度指示が通り、真面目に時間一杯作業に取り組むことができる。しかし、挨拶や報告の声が小さかったり早くなりがちになったりする傾向がある。また、指示通り作業ができず、丁寧な作業ができにくい生徒もいる。そこで一人ひとりの特性に応じた支援をすることで一人ひとりが目標を持って、根気強く作業する態度を育てていきたいと考えた。

②　実践事例

題材名１「分業作業によるコーヒーカップ作り」

a　題材選定について

・コーヒーカップは日常的に使うよく物であり、生徒の生活にもなじみ深い物である。

・製作過程において、粘土練り・粘土配布・陶板作り・胴作り・底つけ・取っ手つけなどの多くの工程がある。そのため分業作業が可能であり、個に応じた作業を選ぶことができる。また、周囲のペースを意識しながら作業することで、適度な負荷がかかり、みんな力で作り上げた喜びや充実感が味わえる。

b　支援の工夫

・生徒の適性に応じた作業分担

１学期の初めに、生徒一人ひとりが何個かコーヒーカップを作って作り方や工程をまず確認した。その後生徒の適性や意欲に応じて作業分担を決めていった。たとえば、体を動かして大きな動きで働いてほしいＯ男には、粘土練り作業、道具を上手に使って丁寧に作業してほしいＴ男には比較的技術がいる取っ手作り作業にというように設定していった。

カップの取っ手付け

・働くリズムづくり

教師だけでなく友だちにも、製品を次の工程へ送る時や道具を借りる時などに進んで報告し、働くリズムづくりに努めた。このことは、一緒に働くんだという意識づくりに役立った。

・目標の設定と反省

目的意識や意欲を持って働いてほしいという願いから、学習の初めに生徒それぞれ

が目標を立て、終わりに反省をするようにした。進行は生徒が行い、まとめは教師がして次時への意欲付けを図っていった。

［指導の実際］

生徒氏名	作業内容・生徒への願い	教師の支援	生徒の様子
Q男 ＜自制心芽の生え＞	粘土作り・粘土配り ・体をしっかり使って、元気よく働いてほしい。	・友だちに仕事を頼まれることで意欲をひきだす。 ・小さくちぎって土練機に入れられるよう仕方を示す。 ・教師と一緒に作業することで集中して作業を取り組めるようにする。	・「○○君粘土持ってきて下さい」「粘土練りお願いしま す」と頼まれ、「はい」と言い喜んで作業していた。 ・粘土を小さくちぎって入れるのが好きで、教師と一緒に一生懸命作業していた。
K男 ＜自制形心成の＞	胴作り ・やり方を確認しながら道具を上手に使って作業をしてほしい。	・型紙に合わせて粘土板の切り方や胴の巻き付け方を示範する。一つできる度に「できました」と報告するようにして丁寧な作業につなげる。	・へらで粘土板を切る時や胴にして接合する時など示範が必要であった。慣れてくると自信を持って作業に取り組むことができた。
B男 ＜自制心の形成＞	たたら製造器を使っての陶板作り ・人のペースに合わせて集中して働くリズムを作り、道具を丁寧に扱って作業してほしい。	・「○○君粘土板を持ってきて下さい」と呼ばれたり、自分で様子を見て運ぶよう声かけしたりすることでリズムよく働くことができるようにする。 ・機械を安全に操作できるよう声かけをする。	・たたら製造機を使う事が気に入り、意欲的に作業を行っていた。「○○君」と呼ばれて張り切っていたが、道具の使い方・粘土板の置き方などが乱暴になることがあり声かけも必要であった。
C子 ＜自制形心成の＞	底付け ・手順を考え、丁寧な作業をしてほしい。	・示範をしてみせてやり方を確認してから作業させる。正しいやり方ができるまで手順を一回一回確 認し丁寧な作業を定着できるようにする。	・細かい作業が苦手で指示通り作業しにくいことで定着が難しかったが、次第に上手になった。 底の切り方が曲がってしまい補助具が必要であった。
H	取っ手付け	・ゆっくりとしたペース	・友だちの様子を気にしな

男 人視 自の 己芽 客生 観え V	・時間を意識しながら、細かい手先を使っての丁寧な作業をしてほしい。	で作業するので、友だちかのペースも意識することで手早さも意識できるようにする。 ・丁寧な仕上がりになるよう部分的な指示を行う。	がら働いていた。 ・どんな形が持ちやすいか丈夫さはどうかなど考えながら、黙々と作業に取り組んでいた。

c　指導を終えて

意識して報告の機会を多く設けたことで報告の声が大きくはりのある声になっていき、活気が増してきた。また、生徒の適性にあった作業を続けるなかで、少しずつこの仕事は自分の仕事だという責任感が育ってきた。さらに、周囲のペースに合わせていくことで働くリズムができてきた。しかし、急ぐがあまりに製品が雑に仕上がってしまうことがあり課題として残った。

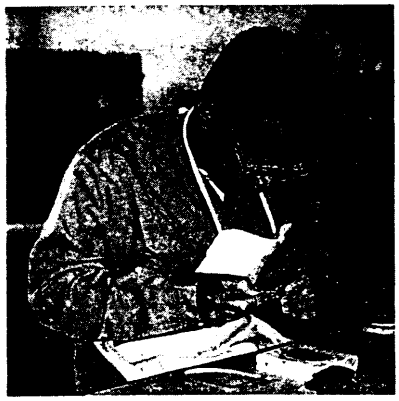
出来上がったコーヒーカップを使ってお茶会を行った。自分たちが作ったコーヒーカップで飲むコーヒーは美味しそうであったし、自分たちで作ったんだという実感を持つことができた。また、実際使ってみてどう思うか感想を述べ合うなかで「口の所がとがっていて痛い」「取っ手が持ちにくい」「釉薬をつけたとき手の跡がついた」など反省につながる感想が述べられ、よりよい製品作りへの意欲の高まりを感じた。

題材名Ⅱ「附養文化祭の即売・体験コーナーに向けて」

a　題材選定について

・附養文化祭での即売会は、生徒たちが普段の学習で作ってきた製品をお客様に買ってもらう場である。製品を買ってもらえる期待感・喜びを感じながら、文化祭に向け、丁寧な製品作りを意識した作業ができる。

・体験コーナーで陶芸班は、「コーヒーカップ作りコーナー」「箸置き、ペンダント作り（型はめ）コーナー」「小鉢作り（成形機）コーナー」の３つのコーナーを設定し、生徒の希望も取り入れながら担当を決定した。新たにペンダント作りを取り入れた理由は、型はめで簡単にペンダントの形ができること、紐など他の材料を組み合わせての物作りが体験できることなどである。これまで取り組んできた作業のうちで自信のあることをお客様に見てもらったり、一緒に体験してもらったりするよい場ととらえた。作り方を教える、質問に答えるなど、自分の場に責任を持って向かわなくてはならないため、仕事への責任感を高めることができ、認めてもらう喜びも味わうことができると考えた。



箸置き作りの様子

b　支援の工夫

・場の設定

文化祭へ向けて、棚の移動をし、乾燥作品、素焼き作品、釉薬をつけた作品の３つ

の棚を決めて作業の流れが生徒にもお客様にも理解しやすくした。また、自分たちの使っている道具を置く場所を決め名前を貼ることで、必要な道具の準備や片づけをしやすくした。また、文化祭までの計画の紙を貼ることで、見通しを持って活動に取り組めるよう配慮した。

・丁寧な作品作りの意識づけ

1学期は、量を意識して製品作りに取り組んできたが、本題材では丁寧な作品作りの意識づけに心がけた。毎時間後できた作品をみんなで見あっていいところや直したらいいところを話し合う、自分で作品の見直しをする時間を設けて修正することなどを通して、売る製品ということを意識できるようにした。また、へら、弓、セーヌ皮、手動ろくろなどの効果的な使い方を教える中で、製品の質も上げていくことにも努めた。

・表示やポスター作り

自分たちの仕事が来られた人に分かりやすいように各コーナーの表示や値札貼りをしたり、来てもらえるように外に貼るポスター・案内板作りを行った。どうしたらお客様に来てもらえるか、買って頂くにはどうするか考える機会を多く持ち、気持ちの盛り上げをはかるようにした。

c　指導を終えて

文化祭当日、たくさんのお客様を迎えて、即売・体験コーナーを無事行うことができた。次々とお客様に作り方を教えている生徒、保護者と一緒に黙々と箸置きを作っている生徒元気一杯声を出しながら活動している生徒など、一人ひとりが、頑張っていた。生徒の反省のなかに「お客様が多くて教えるのに苦労した」とか「最初は、来なくて残念だったが一緒に作ってくれてうれしかった」「来年は小鉢コーナーをするぞ」というような内容があり、頑張ってやり通した喜びや教えることの大変さ、来年への期待が伺えた。

体験コーナーの様子

この体験コーナーを通して、生徒たちに丁寧な作業の大切さが少しずつ分かってきたように思われる。製品を作ることは大変だが上手にできた時はうれしく、この満足感に支えられて次の意欲につながっていくようであった。

また、今回のペンダント作りでは型を教師が作ったが、次は、形をデザインし型作りをする活動から生徒に取り組ませるなど、今後の実践に生かしていきたい。

③　反省と今後の課題

以上のような実践のなかで、働く態度や丁寧な作品作りへの意識が徐々に育ってきた。今後、さらに自分の課題やめあてを意識しながら主体的に働けるような支援を工夫していきたい。また、お客様とのよりよい関わりもめざして、来年度に向けてさらに改善を加えていきたい。そして、個々の生徒が持っている力を十分に発揮できるよう、教師自身も研修を深めていきたい。

（石本晴繁）